

自然談話と音響分析

—「オオカミの大しくじり」を例にして—

川 井 章 弘

Acoustic Analysis of Reading aloud “Ookami no ooshikujiri”

Akihiro Kawai

要旨

音声言語上、明確に表れる要素として、感動詞、フィラー、先触れ音などがある。Praat という音声ソフトが普及される以前、談話スクリプトには、これらの記述は、かなり不安定なものでよく落とされてもいた。

本稿では、音響音声学の先駆けである、杉藤美代子氏の「オオカミのおおしくじり」論を取り上げ、音響分析ソフト Praat 分析によって、音響分析の視点から以下の3点を補足する。

感情をあらわす感動詞「いや」の追加、また「m うまーいもんはないか」形容詞語頭、及び「m うーん」という感動詞の、その感情の先触れとして、「うなり声」が発生している点。

これらの音の付加現象は、オオカミ発話部分にみられ、オオカミに感情移入し、オオカミの肉声・感情を伝える要素であると指摘した。

2点目。音素的な要素とは関係ない、長音が現れている点。これらは、棒読み化を防ぎ、抑揚をつけ、朗読におおきな揺らぎと変化をつける要素であると指摘した。

3点目。Intensity (強弱) の視点から、地の文とオオカミ発話の部分に強弱があり、この弱・強・弱の変化部分に、朗読や落語という、一人の話者が複数の登場人物を演じる場合の話者交代が現れていることを指摘し、可視化した。

キーワード：音声分析ソフト (Praat)、インタージェクション、インテンシ

テイ

Key words : Praat, interjection, intensity

1. 感動詞と感情～紙媒体では表せないもの～

マンガ SNOOPY⁽¹⁾の一節に、次のようなものがある。

シュレーダー：フレンチプードルの中には400ドル以上もするのがあるの知ってる？

チャーリー：知らなかったな

シュレーダー：スヌーピーみたいな犬はいくらくらいだろう？

チャーリー：ハ！あんなの二束三文だよ

(HA! His kind are a DIME-A-DOZON!)

(中略) (後ろ姿のたそがれたスヌーピー)

スヌーピー：ほんとにこたえたのはあの“ハ！”だったと思うな

(I think what really got me was that “HA!”)

スヌーピーを傷つけたのは、「二束三文」という意味を持った単語以上に、「HA!」の言い方だったというのである。スヌーピー、いや、作者は意味を担った単語以上に、「HA!」の部分には話者の感情がこもっており、その侮蔑の感情を聞き逃さなかったのである。

聞き手とその発話内容に向けられた感情が直接的に表す発話要素の一つとして感動詞がある。スヌーピーの落ち込みは、こうした感動詞「HA!」の発声上の問題である。

残念ながら、紙媒体のマンガでは、この「HA!」の音声を実際に現出させることは難しい。もし脚本のセリフなら「HA! (鼻でせせら笑うような感じ)」とでもト書きにするとところであろう。

さて、母音と感情について、大変興味深い YouTube 動画がある⁽²⁾。

自称「独学言語学者」ボブ氏は、五十音の一番最初に来る「あ」だけで人々は十分に意思の疎通ができる」という。そんなボブ氏の監修と脚本のもと、えばそんな氏が「あ」に乗せた感情を実演している。

もちろんエンターテイメントとしての作品であり、系統だった感情分類、応答の体系とは言いがたいが、異なるシチュエーションのもと、さまざまな感情が「あ」に充てられ、例えば、「どうでもいい話を聞き流す時」の鼻と

口に息を抜いた「あ」、「お母さんに置いてかれ残念な時」の「悲鳴にちかいピッチ」の「あ」、「ダチとの友の約束をした時」の声を低く抑え信頼に応え自信に満ちた地声での「あ」、「思い出す時」小さく無声化した形で出力される「あっ」など、「あ」に、さまざまな感情表出が乗せられた作品が公開されている。

筆者は、SNOOPY が聞き取った「HA!」は、えばそん氏の演じた「指輪を排水溝に落としたような相手にプロポーズされたとき (20)」のがっかり感を伴った「あ」に近い音響と推定している。一聞されたい。当然のことであるが、紙媒体の言語音では音声は再現されない。

2. 朗読と音響分析 先行研究

さて、朗読に「音響」といった科学的な視点で先鞭をつけた音声学者に杉藤美代子氏がいる。氏は、古典的名著『声にだして読もう！—朗読の科学—』⁽³⁾において、宇野重吉氏の「オオカミの大しくじり」の朗読を音響分析素材として採りあげる（シナリオは論文末に掲載）。

氏は「オオカミの大しくじり」への分析視点として、ポーズ（間）の問題をとりあげ、起承転結からなる、この民話のクライマックスシーンの語りでは、「ポーズの数も少なく、ポーズの数も極端に短くなっています」と指摘している。当該部のクライマックスシーンは、ポーズの短さと相まって、「スピード感」があり、息つく間もなく、畳みかけるように話を進行させている。その要素としてポーズの有無が機能している点を指摘している。

また、氏は、次に強調の音声をとりあげ、「タッタッタッタッ」と漸相的に強まる声量を通して、飛脚がオオカミに近づく動きを示し、「タッタッタッタッタッ」と漸相的に弱まっていく音量を通して、飛脚がオオカミから遠ざかる動きを表現する強さの度合い (intensity) をとりあげている。こうした、「間（ポーズ）」の回数や長さ、擬音語の漸相的な強さの度合いを通して、飛脚がオオカミの腹の中に入り遠ざかっていく臨場感あふれる語りの芸を具体的な数値で視覚化し、宇野重吉氏の朗読の巧みさを絶賛している。

もちろんここに関しての異存はないし、こうした間 (pause)、強調 (intensity) などの分析視点は、さすが音響分析の先駆者であり、その精度はいまも感嘆に値するものである。

しかし、Praat という音響分析ソフトを、だれでもが手にするようになっ

た昨今、杉藤氏の時代が見逃がした本作品への「朗読」分析の視点があるのではないか、と思うようにもなった。

以下、本稿では、朗読分析として、分析のための視点を1点追加、また「自然談話」では重要な「音響分析」の要素を2点、杉藤論に付け加えておきたいと考える。

3. 杉藤氏が、見逃した視点とはどのようなものか。

前掲書「オオカミの大しくじり」では、2つの台本が載っている。p33のシナリオとそれにポーズの時間を加えたp35のスク립トの2点である。短いものなので、p33のシナリオ全文を本稿の最後に載せておく。

さて、杉藤前掲書では、ポーズを分析することが主な目的なので、やむを得ない点はあるが、18行目「うむっ」しか、感動詞の記述がない。しかし、これは、とても重要な音響の要素であり、第1節、スヌーピーの節で指摘した、感情が表れる部分でもある。

私見によれば、この朗読音声スク립トの「ありがたい、ありがたい（9行目）」の冒頭部には「iyaa、ありがたいありがたい」と、ローマ字で印したような感動詞「いやー」が出現している。

また、「うまーいもんは、ないか（4行目）」という冒頭部に「m うまーいもんは、ないか」、さらに同じく、「うむっ、ざんねん（18行目）」の冒頭部には、「u うーんざんねん」のように、単語が表出される前に、ローマ字で記したような低音の「唸り声」が付加されている。

なお、声道の閉鎖性を伴わない、喉頭原音とも判断される、こうした唸り声のような、非言語音を記述する音声記号は存在しておらず、とりあえずここに「iyaa」「m」「un」「u」などと記したが、これらの原音は音声記号にはなじまないものであることをお断りしておく。

2点目。本朗読は民話として、母音の伸びがかなり頻繁に目立つ語り口となっている。この点について杉藤氏は「むかーし、むかし（1行目）」と長音があり、長音の効果性によって、「現実からへだたった民話の世界へ聞き手をひきいれていきます」と指摘し、また、母音だけでなく、子音を長くさせた「のそののそらと（5行目）」は、「悠然とオオカミを登場させる」手法であると指摘し、この長音の存在とその効果性をきちんと熟知している。

しかしながら、スク립トに反映された長音は「うまーいもんは、ないか

(4行目)「オオカミ^ア (10、17行目)」の下線部の合計4か所であり、スクリプトにおける長音の記述と氏が論考部分で述べた「むかーし」「のそらのそらと」という部分とでは、「長音」そのものの認定にずれがあり、音韻論のレベルで、長音の認定そのものが大変気にかかるのである。

3点目。発話の強度 (intensity) についてであるが、スクリプトには「口を大きくあけて、待った (10行目)」と、意味を担う単語に傍点を打ち、そこが強調されていることを示している。また、この朗読の、もっとも魅力的な語りの部分である「タッタッタッタッ」というオオカミの足音の強弱により、オオカミの接近、立ち去りを表す部分に多くの考察が割かれているが、こういった intensity の視点とは異なる視点として、談話分析的な視点を加えることができるように思う。

朗読分析の視点として以上3点についての重要性を本稿では主張する。以下、次節以降で順次3点の問題をとりあげる

4. 音の付加

4-1. 感動詞の付加現象について

冒頭に「いやあ (iyaa)、○○ですか」などのように、「驚き」「感嘆」の感情をのせて聞き手をひきつける感動詞が使われることがある。

「オオカミの大しくじり」において、この感動詞は、シナリオにない語り手・宇野重吉によって付加された部分である。

オオカミが、腹が減ってたまらず山から下りて来て、これから食料さがしに苦勞しなければならぬものと思っていた矢先、エサである人間側から近寄って来たことを足音で察知した場面である。飛んで火にいる夏の虫とはこのこと。千載一遇のチャンスを迎え、手もみして待つオオカミの驚きの肉声が伝わってくるような感動詞の付加である。

ここの「いや」は、反対立場表明の「いや」ではない。「いやあ、おいしい。いやあ、困った」などの「いやあ」で、「あー、うーん、おお、はっ」などととともに、概念としてではなく、話者 (登場人物) の感情をダイレクトに示す用法である。

たとえば、グルメ番組のレポーターの感想を例にとってみよう。

「○○の宝石箱やー」のフレーズで人気を博す彦摩呂氏は、そのフレーズの起源について NEWS ポストセブンで以下のように解説する⁽⁴⁾。

北海道のロケに行って、魚市場の賑やかな市場食堂で海鮮どんぶりが出てきまして。その輝かしい新鮮な刺身たちを見て、「うわぁ、海の宝石箱や〜！ と言うたんですよ。

(中略) イクラがルビー、アジがサファイア、鯛がオパールみたいに見えたわけです。

(NEWS ポストセブン「彦摩呂『〇〇の宝石箱や〜』はマンネリ打開のためだった」)

と紹介されている。このことについて、認知言語学者の辻本智子氏は、このフレーズが異常に受けたのは、メタファーの新規性だと指摘している。

もちろん、これが個性的なフレーズであり、これは新しい「比喩」の創造といった視点でもあるという辻本氏の指摘は正しいと考える。しかしここで、筆者が問題にしたいのは、感情の真実味をあらわす、「うわぁ」の部分である。「〇〇の宝石箱や〜」ではなく、きちんと感動詞「うわぁ」まで入れて、「うわぁ、海の宝石箱や〜」と、このギャグを彦摩呂氏自身が紹介している点である。

彦摩呂氏にとって、「うわぁ」の価値を物語るもう一つの実例がある⁽⁵⁾。

お笑いタレントのかまいたち氏が、彦摩呂氏の「代表作のギャグの宝石箱や〜」(0:27sec)を買い取りたいと申し出る。それに対し、彦摩呂氏は、それを「うわぁ、海の宝石箱やぁ (01m:21sec)」と実演している。

すなわち、買い取り手のかまいたち氏が買い取りたいというギャグのフレーズの認識は「うわぁ」を省いた「〇〇の宝石箱やぁ」であるのに対し、彦摩呂氏にとっては、「うわぁ」は省けないもので、「うわぁ」まで入れないと、自分の完成されたギャグではないということがここで示されているのである。彦摩呂氏は「うわぁ」の持つ重みを実感しているといつてよい。

食レポは、食べた直後の咄嗟の反応が大きい。ここでの「うわぁ」の持つ「実感性」という意味合いが次の「宝石箱」という比喩の情報の真実味を伝えているからである。ともあれ、「歓声、驚きという感動詞+コメント」が、座りのいいひとつのセットとして彦摩呂氏に意識されていると言える事例である。

迂回したが、宇野重吉氏の、腹を空かせたオオカミになりきっての肉声が、

シナリオにはない「いや」という感動詞として現れているのである。

さて、Praatが一般化される以前のスクリプトでは、感動詞やフィラーの多くを落としてしまっていて、書き言葉に近いスクリプトであった。こうした実感性が現れている要素が音響的に出力されるかどうか、生の音声資料を扱う上において非常に大きい問題だと筆者は考える。

また、こうした朗読という音声言語素材や、TV番組のグルメレポートは、視聴者が実感できない物に、「ほんもの感」を持たせたりする工夫が随所にみられる。また、嘘つきの人狼をあぶりだすコミュニケーションゲームなどでは、こうした感動詞やフィラーが、情報に真実味をもたせたり、疑念を惹起させる要素として、発話内容以上に、発話者の態度や感情自体を表している。(が、ここでは「人狼」にはこれ以上深入りしないでおく⁽⁶⁾)

ともあれ、宇野の肉声としての「iyaa (いやー・いやー)」は以下の音響として出現している。

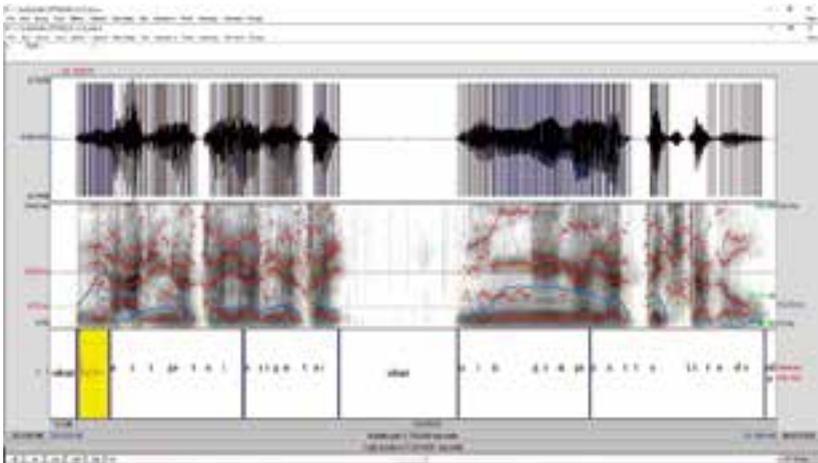


図1 音声ソフト Praat による出力図

「iyaa ありがたい、ありがたい。」と「iyaa」は、確かに音響として出力されている。

飛脚が腹の中を駆け抜ける時の「タッタッタッタ」の擬音の強さの部分を除けば、感動詞「iyaa」は、持続時間0.167secで、833hz帯から最高値2262hz

のピッチへと声の高さが上昇し、ふたたび833hzのピッチで「ありがたい、ありがたい。」と続くために、非常に強く高く印象づけられる部分である。

この場面、空腹で山から危険を冒して降りてきたオオカミの喜びの歓声が、肉声として具現化しているという言い方が可能だろう。

また、この種のオオカミの内心を表した感動詞に、「un ざんねん。」がある。

感動詞 [un] の持続時間は、0.80sec と長く、ピッチも最低272hz から最高1189hz と低い。先の [iyaa] に比べると半分近い低いピッチである。先の [iyaa] に比べ、こんなに低い音響となるのはなぜであろうか。

それは、この場面、せっかく食事にありつけると思ったオオカミの長い嘆息をなぞったものだからである。宇野氏はオオカミの落胆の心情と同期させているのである。

この非言語音を文字の上で、[un] と記しはしたが、実際の声色は、「うゝ」に近く、腹の中から絞り出したしわがれた声である。呻きに近い音である。おそらく、筆者は、声道内での閉鎖性を伴っていないため喉頭原音ではないかと推察している。

杉藤氏が見逃した事例をもう一つあげる。

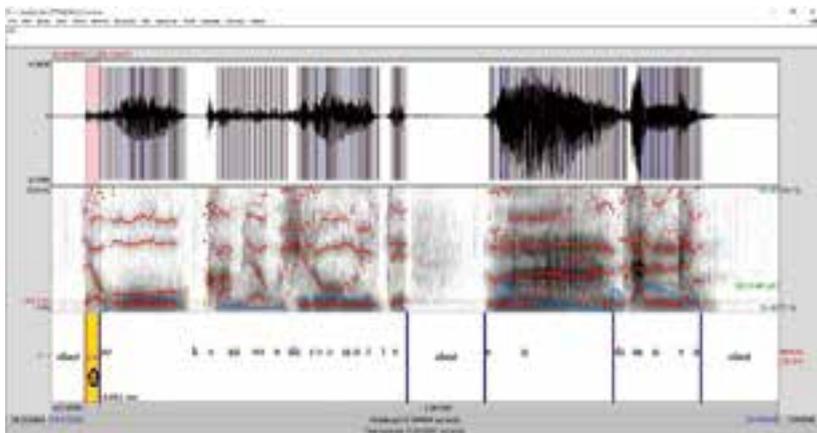


図 2

「ya オオカミア、うしろをむいて、un ざんねん」の冒頭部である。図 2 の冒頭で掛け声のような [ya] という声が入る。おそらく、第三段落で、飛脚

がオオカミの腹から抜けて去って行ってしまった、そうしたオオカミに「やあ、ひどいオチになっちゃったねー」とでもいう、宇野重吉氏のオオカミへの同情感が肉声になって出現したものであると考える。

さらに、次の例は感動詞というより、唸り声の添加といった例である。「m うまーいもんはないかな」の冒頭に出現する。[m] 音である。

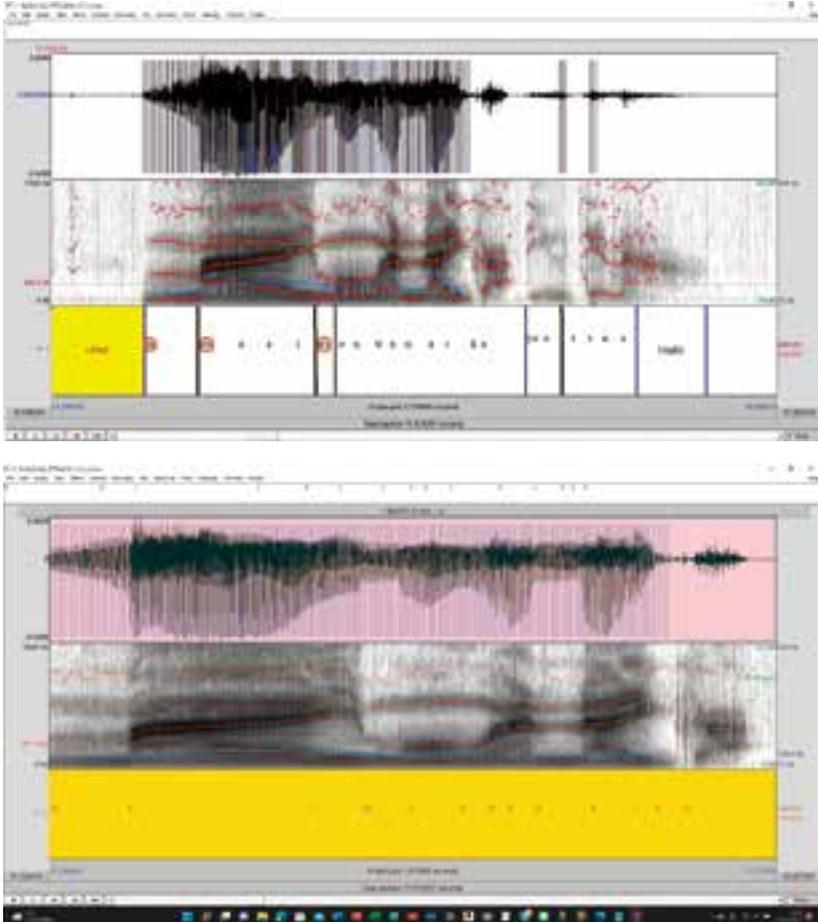


図 3

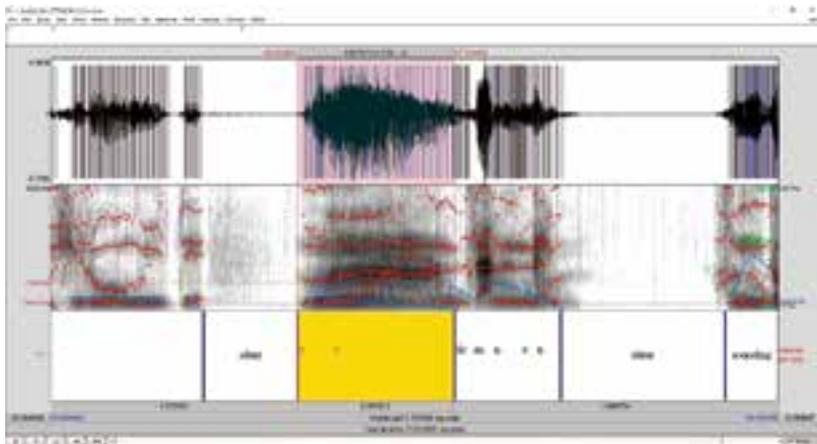


図 4

それにしてもオオカミの発話の冒頭に集中して現れている。これも先と同じように、この非言語的な音の有無が、オオカミの望外のチャンスに際し、オオカミの心の声を代弁する語りになっているからであろう。

4-2. 唸り 感情の先触れ音について

感動詞の添加のところで触れたが、挿入された感動詞の冒頭が、多く、唸り声となっている。さらに、もう一例追加すると、「むかし」は、[mukaashi]ではなく [m mukaashi] のように出力される。また、「うまいもんはないか」の冒頭部でも [m うまーいもんはないか] である。

宇野氏はオオカミの立場と感情を念頭においたためだろうか、これらは、かなり喉の奥で声帯を振動させる唸りに近い音である。「m m うまい」「m m ざんねん」など、その感情が真であることを伝える感情の先触れ音として出現している。

この点、おそらく「声門閉鎖音」が日常的に現れると考える川原氏⁽⁷⁾であれば、これらは、グロツタルストップ [ʔ] ではないかと推定するように思う。しかし、筆者は、CDに直接あたった結果、これらは、声門での閉鎖がおこなわれておらず、声門閉鎖せず喉の奥で振動させる唸り声に近いので、喉頭原音なのではないかと考える。

ともあれ、こうした異音の参入が、オオカミの内心を肉声として伝えることに成功しているのである。そして内から絞り出すこうした声は、心の底からそう感じられるような説得性を与える効果となっていることを記しておきたい。

次に「オオカミの大しくじり」からではない例もあげよう。

「まいうう」の反応で有名な食レポ界の先駆者である石塚氏がいる。彼の「まいうう」は、時に、「Nm まいうう」となることがある⁽⁸⁾。

以上、第4節では、「m うまい」「iya ありがたい」「mn ざんねん」など感情表出の前で音響上、顕著に観察される感動詞や喉頭原音などの、音の付加の現象を指摘した。

5. 長音化

杉藤スクリプトで、意味の弁別に供さない長音化が施された部分は以下の2語である。

「うまーいもんはないか。」「オオカミア（2例）」である。もちろん杉藤氏の指摘自体に誤りはない。

しかしさらによく聞いてみると、「なにか食うもんはないか」の部分、「な↑あにか」となっている。「na:nika」の「な」の音節の母音部分をすこし伸ばして、長音部にアクセントの滝をもってきている。拍の途中で、アクセント変化を起こすことは共通語には通常ない。

音節を構成する母音を伸ばし、前部から後部への母音の途中で pitch を変化させ、歌のようなゆらぎを作り出しているといえる語り口である。

また、スピードに関し、杉藤氏の指摘どおり、同じ7拍7音節ながら

「のそらのそらと」 「おりてきたわい」

(1.336sec)

(0.594sec)

前者は、後者の倍近く遅く話している。

オオカミが「のそらのそらと」、腹が減って重い心身を抱え、だが命の危機でもあり可及的速やかに「おりてきた」というような工夫を物語っているところだろう。

他にも、単語の中で、スピードが緩急自在に変化する例などがある。

おそらく、こうした長音化現象や緩急自在なスピードの変化は、「(特殊拍を除けば)日本語が等時拍である」という共通語の原則をそもそも破っている

る結果なのではないだろうか。音節末尾の長音化は、おそらく、宇野氏が詩を読む時のように感情を入れて、朗読という大きなゆらぎの中で読むことに主眼を置いたために生じた現象だったように思われる。

このことは、例えば次のように考えてみるのがわかりやすい。現在、YouTube 等で、原稿をソフトに読ませて情報を発信するスタイルが流行化している。その際に使われる音声読み上げソフトは、現在ではかなり流暢で自然なものが増えて来ているが、ほんの数年前までは、棒読みだったのではないだろうか。そしてこの棒読みソフトの棒読みたる理由は、一拍一拍を均等に時間割りし、一定のスピードで、声に抑揚を与えることができなかったためではなかったか。

宇野氏は、演劇において、朗読において、この対極を実践しようとしたのではないか。単語ごとに、固有の色をつけ、単語ごとの音色を奏でる。これが、宇野氏の、独特の語りのリズムを作り出す根源的理由だったのであり、その意味で、一音一音とりだせば、おそらく、宇野朗読は、単語の中で、均等の時間で割り振られる音節はないのではないだろうか。（もちろん「タッタッタッタ」は、軽快に走るリズムを維持しなければならないものではあるが。）

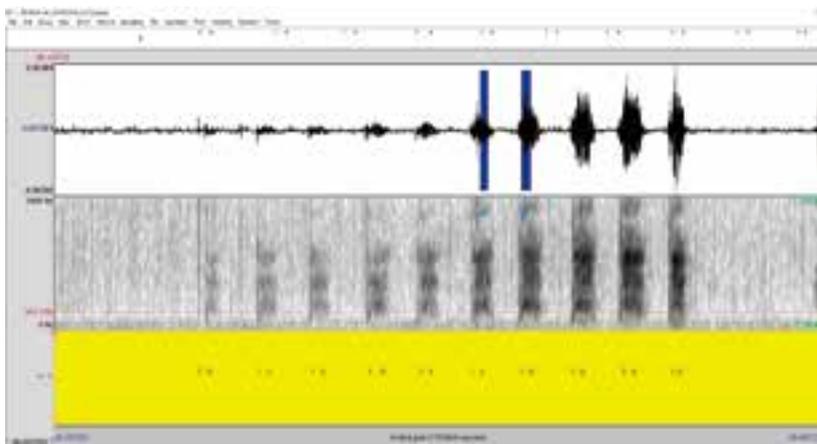


図5 タッタッタッタッタ

黒い縦棒が規則的にならんで、次第に大きくなっている。

もちろん、こうしたことは、素人ができることではない。これがあって、また、日常にはない語り口が光彩を放っているのである。

宇野氏はタイトルを読み上げの段階からして、すでに、変化に富んだ語り方である。

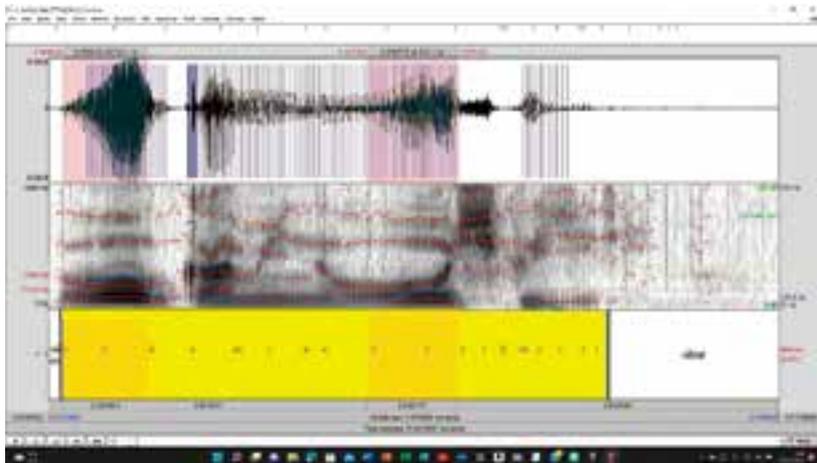


図 6

網掛けした2つの長音 [oo] は、「オオカミ」では、最大値1208hzの非常にピッチの高い音（音階でいえば「レ/D6」相当の音階）であり、「大しくじり」の [oo] は、最大値714hzの低いピッチ（音階でいえば、その一段下の「ファ/F5」相当の音階）で、この音色の違いから両者が同じ音色の [oo] とは到底聞こえないだろう。

最後に「声の強さ（intensity）」の視点から当該の朗読を見ていくことにする。

6. 声の強さ（intensity）から見た朗読

図の上部波形の振れ幅で一目瞭然であろう。

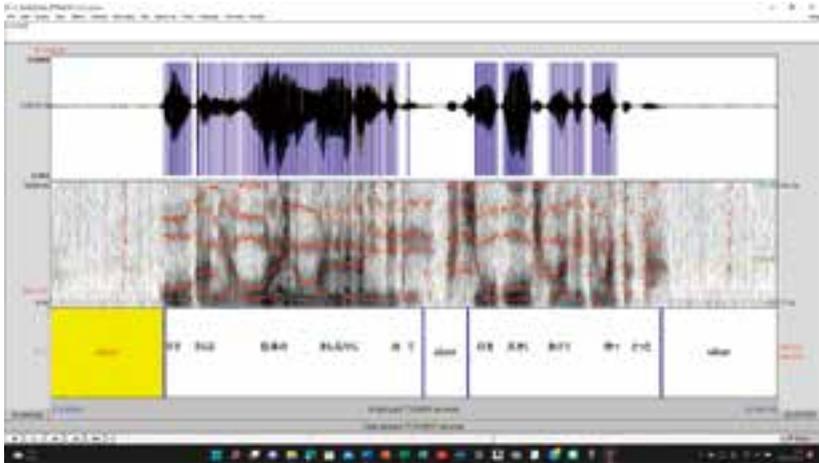


図 7

「口を大きくあけて待った」の「大きく」の発話は、杉藤氏も傍点を振ってその強さを意識されている。しかし、強さの絶対量からみれば、この「大きく」は「前の往來の真ん中に」とほぼ同じ出力でしかない。なぜ「この大きく」が強く聞こえるかというと、「大きく」発話の直前の「口を」、直後の「あけて待った」との比較で、当該部は相対的に大きく強く聞こえるのである。この前後の発話の相対的な強さによって、強弱感を出す技は、落語家が声量や声の高さを変えて、人物を演じ分けする際に頻繁にみられもする。

さて、ここで、杉藤氏が見逃した *intensity* の観点とはどのようなものだろう。

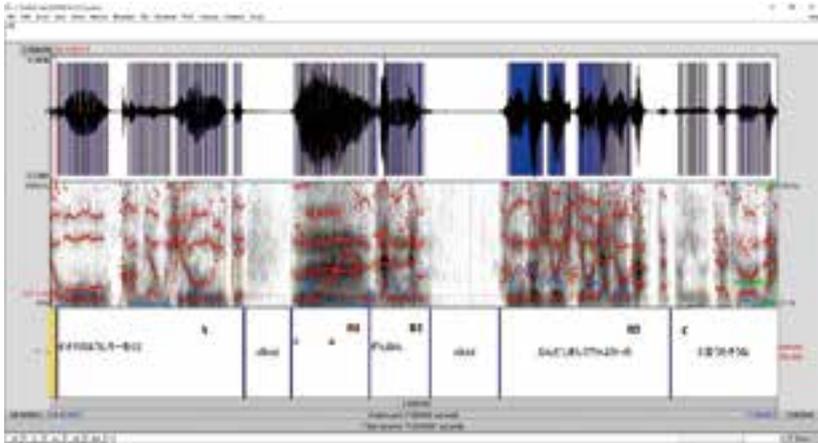


図 8

語りの強さ (intensity)

A	オオカミア、うしろを 向いて	70.6988073382724 db (mean-energy intensity in SELECTION)
B 1 B 2	うむ。さんねん	76.36979493713002 dB (mean-energy intensity in SELECTION)
B 3	ふんどしを、しておりゃ あ、よかった	74.3875754525183 dB (mean-energy intensity in SELECTION)
C	と、いうたそうな	60.23624790380001 dB (mean-energy intensity in SELECTION)

Intensity の平均値を調べたものだが、これは、声の強さを表す。大きな声を使っているかである。図 8 の上端の波形の強さを見れば、一目瞭然であるが、B 1、B 2、B 3 の音波の幅が広い。

すなわち、地の文の語りは、比較的優しめに、オオカミの肉声は比較的強く語っているということである。

また、このデシベル (dB) という単位は、街中の騒音などを調べる指標として使われ、人間の聴覚の限界を基準に聞こえの相対的な大きさを表す。音量の絶対値ではないので、以下のような指標がある⁽⁹⁾。

80デシベル	うるさい	救急車のサイレン パチンコ店の店内
70デシベル	うるさい	掃除機の音 騒々しい事務所の中
60デシベル	普通	普通の会話 チャイムの音 デパートの店内
50デシベル	普通	エアコンの室外機 静かな事務所の中
40デシベル	静か	閑静な住宅街 図書館の中
30デシベル	ささやき声	深夜の郊外 鉛筆での執筆音

上記の指標にあるように、ここでは、「普通の声」「デパートの店内」レベルの地の語りから、オオカミの声になると「騒々しい事務所」「掃除機の音」のレベルに音量が跳ね上がり、また、「普通の声」の声量で地の語りとして静かに物語が終焉していくということが視覚情報としても容易に確認することができる。この intensity の差によって、語り手とオオカミの発話という話者交代がなされているのである。

7. 最後に

「音響分析で何が調べられるのか？」について述べたいと思う。

自然談話においても intensity は、大変重要な音響要素である。たとえば、異なる話題が連鎖する自然談話の中で、発話者が興味を持って話していることか、また反対に関心が薄いことか、数値化し可視化して把握することができる要素である。

意識すれば、相手の嗜好にあう話題に切り替えられる可能性につながるであろう。逆に、対話する相手の感情を数値で察知し、なんらかの異変を察知できれば、事前にトラブルを回避する可能性を高めることもできる。以前は、人と人とは対面でおこなう「感情分析」は、場を踏むことでなんとなくわかるようになったものであるが、現代では、それを他人まかせどころか機械にゆだねてしまっている場合が起きつつあるようである。人間同士の会話にAIがかってに割りこみ、感情判定して人間の会話をコントロールしている

場合があるのである。

筆者の体験談であるが、筆者は本は持ち運びに苦勞するので、もはやネットでの購入、デジタル書籍派である。先日、PCで、とある書籍を購入したところ、ダウンロードできない状況に陥った。ダウンロードできないので、ふたたび、クリックして本を購入するが、これまたダウンロードできない。ダウンロードできないなら課金が発生しようがないので、三度、四度、購入ボタンを押す。

結果、購入した本が、同じ本5冊という処理をされることになった。

しかたなくコールセンターに電話をし、相談することになったのだが、その際に、コールセンターの職員さんが、「また、どーして、おなじ本を5冊も？」と尋ねて来たので、決して筆者の声に怒声がかまじていたわけではないと思いたいが、「え、だって、その本ほしいのに、ダウンロードできないんですよ。」と応じた。

「えっ、だって」「んですよ」が、コールセンターのAIコードに触れたか、筆者の声に怒声がかまじると判定が下されたのかは定かではない。

怒声の算出方法は、さほど難しいものではない。今まで話していた発話より、intensityが強くなれば、怒りとして判定し、職員に注意を促すようにしておけばいいだけの話だからである。むしろ、怒りとは何かなどと人間の本質に迫るような思考をして、怒りの絶対量で人が怒っているか否かを測定しようとする、外からの電話では大声になりがちで、怒り判定をしまいかねない。あるいは、家の中でも、たまたまの宅配便に、比較的大きな声で「いま、いきまーす」で、怒り判定されかねない。

コールセンター内で、ブザーがなったのか赤いシグナルが点滅したか。筆者が「だって」発言をした刹那、コールセンターの応対が、ウソみたいに変った現実を先日、目の当たりにした。調べてみるとコールセンターでは、すでにAIによる感情分析は実装済みで、すでにNTTやLINEが運用しているということであった。AIが「怒り」を事前察知し、互いに不快にならずに済んだ一件である。

今後、よい交流と活発なコミュニケーションのために、談話の中での音響分析の視点はますます有効なものとなっていくだろう。

(付記)

査読者から、宇野重吉の語りの冒頭部「むかーし、むかし」は、昔話の語り口を強く受けており、その語り口自体「歴史的に形成されたもの」という視点が必要であるとの指摘をいただいた。そのとおりであると思う。ご指摘に感謝申し上げます。

ただ、本稿は、共時言語学として、本朗読に現われる音響現象の視覚化に的を絞ったため、通時性の視点での「語りの歴史性」については紙枚を割愛させていただいた。

注

- (1) チャールズ M. シュルツ 訳者 谷川俊太郎『ピーナッツ・ブックス④ スノーピーおん大賞』ツル・コミック社 1979
- (2) 『あ』の言い方50選-YouTube
<https://www.youtube.com/watch?v=rweOCmC-bgw> (2022/11/21 アクセス)
- (3) 杉藤美代子『声にだして読もう！—朗読の科学—』明治書院 1996.6
II とびきり上等な朗読 (p32-p41)
- (4) なぜ彦摩呂の「〇〇の宝石箱や～」は異常にウケたのか…言語学者が考えるメタファーの力「お肉のIT革命」「麺の反抗期」が流行らなかったのはなぜか | PRESIDENT Online (プレジデントオンライン)
<https://president.jp/articles/-/56838?page=1> (2022/11/21 アクセス)
- (5) 【宝石箱や～💎価値は5億】宝石箱ビジネス裏事情！かまいたち山内 & 濱家が彦摩呂から人気ギャグを買おうとするも破格の価値がある事が判明！ぜにいち毎週月曜23時からアベマ放送中！-YouTube
<https://www.youtube.com/watch?v=CixZIL4Kw6s> (2022/11/21 アクセス)
- (6) 嘘つきの人狼をあぶりだすコミュニケーションゲームでは、声の抑揚や強さなどで、発話者が嘘を言っているかどうか判断している。
【第一回】ゲーム実況者人狼ゲーム (<https://youtu.be/GTGdyeuzXdY>) 19:30～19:42
- (7) 川原 2018 p29, p97 日本語にも頻繁に声門閉鎖音 [ʔ] が出現していると説く。
- (8) 【しゃぶしゃぶ温野菜】食べ放題のボリュームに石ちゃん感動！-YouTube
<https://www.youtube.com/watch?v=wa3X9B3w5Oc> (2022/11/21 アクセス)

10:43~10:50 nnn まいう

また、文末では、

07:14 すごいなあ 11:13 すごいよね 12:33 ワイン飲みテェ の下線部にうなり音のような低音が響いて、おいしさの実感を伝えている。

(9) デシベルについては「昭和音響」のHP 参照

<https://www.showaonkyo.com/column/2022/12/30> デシベルとは？ (2023/01/06 アクセス)

引用文献

杉藤美代子『声にだして読もう！—朗読を科学する』明治書院 2003/05

川原繁人『ビジュアル音声学』三省堂書店 2018/07

参考文献

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房 2017/11

参考資料

国立国語研究所 第9回コーパス利用講習会、Praat・ELAN 講習会 2019/08

<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/event/lectrue9.html>

音階とピッチの具体音に関しては、「12平均律と周波数」のHP 参照

https://www.aihara.co.jp/~taiji/browser-security/js/equal_temperament.html

杉藤前掲書 p33「オオカミの大しくじり」のシナリオから抜粋

オオカミの大しくじり

むかし、むかし。

オオカミが、おったわい。

えろう腹がすいたもんで、

「なにか、食うもんはないか。うまーいもんは、ないか。」

いうてナ。山のおくから、のそらのそらと、おりて来たわい。

ひょいと 耳をすますと、

タッタッタッタッタッタッ

足音が するわい。

「ありがたい、ありがたい。人間が やって来たぞ。」

オオカミア、往来のまん中に出て、口を大きくあけて、待った。

やって来たのは、いそぎの飛脚じゃ。

タッタッタッタッタッタッ

オオカミの口の中へ とびこむと、腹の中を、タッタッタッと

走りぬけ、尻からポーンとぬけて、そのまま、

タッタッタッタッタッタッ

と、走って行ってしもうた。

オオカミア、うしろを向いて、

「うむ。ざんねん。

ふんどしを、しておりゃあ、よかった。」

と、いうたそうな。